

蜻蛉譜

白菜のやは葉に溜る日のうつら蜻蛉の影のうつらひやまぬ

秋晴れのやは陽い照らふ栗穂立蜻蛉を止めて末枯れにけり

移り来て踏む庭土に蝉殻の一つ止まりし松毬を拾ふ

露低く下枝を這へる桑の秀に頬白一つ鳴きしきる見ゆ

(昭和十五年山桜十二月号)